

# 書評

スタニスラス・ドゥアンヌ 著, 高橋 洋 訳: 意識と脳—思考はいかにコード化されるか, pp. 472  
紀伊國屋書店 (2015)

どうしても読みたいと思って手に入れたのに, どこかに埋もれて見つからずにいた本を, 先日記憶を辿って漸く見つけた。ドゥアンヌの「意識と脳」である。昨今は世紀の大発見と「重力波」の話題も世間を賑わす。宇宙の興味もさることながら, 「私はいったい何者か?」という問いは, 筆者には避けて通れない。常に頭の片隅を支配している難問だからだ。

木本圭子氏の著書「イマジナリー・ナンバーズ Imaginary Numbers」の一作をカバー図版とした本書には, 2000年にノーベル生理学・医学賞を受賞したエリック・カンデル氏の帯推薦文に始まり, 見開き紹介文へと, 次々胸踊る文章が続く。

『私達の思考, 感情, 夢はどこからやってくるのか? この問いは子供でも考えつくほど単純なものだが, 意識的な経験の起源に関する問いは, これまで何千年にもわたり哲学者や科学者を混乱させてきた。』

筆者は一度, 「私が狂ったら, 狂っていること, ないし, 狂っていないことをどのように私は確認することができるのだろう」と真剣に考えてみたことがある。果たして, 客観的に「狂っている」ことを定義できるのか? それもある種の科学的問いではある。一方, 仮にそれができたとして, 主観的な私はその客観的事実とやらを, 主観的に受け入れられるのだろうか? あるいは体験として納得できるのだろうか, と疑問は尽きない。ルネ・デカルトの「我思う, ゆえに我あり」の言葉は多くの人が知るものであるが, 数理的合理主義で見える脳の姿は限られていると言わざるを得ない。ドゥアンヌのアプローチは, コンシャスアクセス (Conscious Access) を基軸とするものである。コンシャスアクセスとは, 私という意識が, 私の中に入って行く行為のことである。この概念を, 科学用語として使用できる一つの語に表せることが, 西洋言語の論理性の強みなのかもしれない。「琴線に触れる」などといえは, 少々叙情的すぎる。訳者も意味が変わることを危惧したのであろう。本文中「コンシャス

アクセス」に統一した。現に, 脳内で刻々と変化する情報処理過程には, 意識的にアクセス可能な部分と, (まず) アクセス不可能 (と考えられている) 部分が存在する。後者が, 無意識と呼ばれる領域で, かのジークムント・フロイトが生涯を掛けて言及した問題である。無意識の扉は, 私には開けることができない。

言っておくが, 本書は哲学書ではない。著者も認知神経科学者である。本書の骨子は, 過去にどんな認知心理実験・脳活動計測手法が試みられ, 意識・無意識の境界を科学的研究として探ってきたかの詳解と今後の展望である。その詳解は実験研究に留まらず, その情報表現, 処理過程の再現に取り組む数理モデル化の可能性にまで踏み込む。それなのに, 最後には, サルの自己意識の存在を認めたくえで, 人間との差異を言及するその姿勢には, 少々狂気さえ感じる。しかし, 歴とした最新脳科学についての科学書なのである。見慣れない専門用語には, 熱意のある読者に向けた豊富な図が理解を助け, 77ページにもわたる充実した参考文献リストは専門家にも嬉しい。各章で議論した内容についてのどの文献にさかのほればよいのかこれだけ詳細なものも珍しい。

さて, 冒頭の木本氏, もし知らない方がいたら紹介したい。コンピュータシミュレーションを用いた数理モデルの視覚化で独自の美しい世界観をつくり出したと呼び声が高い芸術家であり, 木本氏は JST ERATO 合原複雑数理モデルプロジェクトでも技術員として研究活動を行ったと聞く (プロジェクト概要資料より)。2003~08年まで進められた同プロジェクトは, 実在する複雑な諸現象を理解するための分野横断的基礎理論の重要性を訴え, 非線形科学, 生命科学, 医学, 情報科学, 工学などをつなぐことを試みた挑戦的な研究プロジェクトであった。無論, 「イマジナリー・ナンバーズ Imaginary Numbers」は必見である。それにしても, あの絵, 初見のときに, どこかで見たような気がしたのは, やはり気のせいだろうか。

[我妻 広明 (九州工業大学)]